

会長時評

27 時間テレビで届いた笑顔 深まる連携 各方面と



7月にFNS 27 時間テレビ内で、「三宅島の帰りたくても帰れない人々に笑顔を届けます」という番組が組まれた。出演者の香取慎吾さんや、泉ピン子さんの励ましにより、素晴らしいひとときとなった。

香取さん 映画を島に
猛暑のおりから、いか
がお過ごしでしょうか。
か。謹んでお見舞い申し
上げます。
まず三宅島ではありえ
ないロードショー中の
「西遊記」8月29日の上

三宅島新報

発行所：三宅島ふるさと
再生ネットワーク
〒100-1101
東京都三宅島三宅村神着 320-2
Tel. 090-4922-0798
発行人：会長 佐藤就之

観光客とともに行われた
夏のイベント、「マリー
ンスコーン」

宛先 〒137-8088

映(三宅村商工会青年部)
のいきさつから。
7月28日午後8時頃フ
ジテレビ「三宅島の帰
りたくても帰れない人々
に笑顔を届けます」の番
組を見てもらえましたか。
撮影に来た19日、伊豆
へリポートで香取さんが
島の子供たちに「西遊記
を見てね」と、子供た
ち。なんと香取さんフジ
TVの協力を得て夏休み
最大のプレゼント。すご
い!(6面に関連記事)
みんな、香取慎吾さ
ん、泉ピン子さんに、あ
りがとうのお便りを出し
てネ。

事務局便り

○第9回世話人会開催
9月25日(火)夜6時
30分から。飯田橋セン
トラルプラザ10階会議
室Aにて。

○ご寄付について
前回の新報10号の記事
を読んで下さった方々
から多数のご寄付を頂
きました。ご協力あり
がとうございます。こ
れからもよろしくお願い
致します。(寄付者名6面)

郵便振替口座
口座番号：00120-3-545036
口座名称：三宅島ふるさと
再生ネットワーク

事務局：あすなろ保育園内
住所：〒173-0005
東京都板橋区仲宿 25-6
電話・FAX 03(3963)5697
担当 伊藤・鈴木

港区台場2-4-8フ
ジテレビ バラエティ製
作センター 上野貴央方
神戸でも「観ました」
ふるさとネットの活動
も皆さまのご協力のおか
げで着実に実り拡大して
いる。
今回のフジTVでの放
映から始まり「西遊記」
の上映。島出身の知人の
肉親の不幸に涙するピン
子さん。被害の現状に強
く心を打たれたお二人の
暖かい思いやる心がひし
ひしと案内役の私にも伝
わってきた。
7日神戸に研修に向
いたおりで「フジTV
を見た。頑張っつね」と
激励された。これらは撮
影にご協力頂いた島民の
皆さんのおかげです。
また最近、協力者のご

紹介で阪神淡路のボラン
ティア、大学の医療、災
害看護の先生との連携も
進んでいる。
積極的なガス対策を
火山ガスは、低下した
とはいえ現状は変わりが
ない。阿古の高濃度地区
の立ち入り緩和策も期限
となる。このままでは三
宅島の復旧はおろか復興
には程遠い。
ガスとの共生・共存を
覚悟して帰島してきた私
たちと行政や専門家と称
する方々との溝は深い。
行政は現状に「仕方がな
い」としてないか。ガス
対策に積極的な方法は
あるはずだ。生活再建の
施策を打ち出さないと島
は再生できない。島の将
来を考えて行動を起こし
て行きたい。(佐藤就之)

初の訪問活動勉強会

心構えや留意点を学習

大学の先生講師に活発な質疑応答

訪問活動に関するふるさとネットの勉強会が、7月9日に行われた。講師を務めたのは埼玉県立大学の及川先生と埼玉医科大学の久保先生。参加者からは多くの質問が出され、今後も続けることになった。

勉強会が行われたのは、板橋区役所駅近くにあるあすなろ保育園。出席したのは、ふるさとネットのメンバーとして在京島民の訪問活動をしている同保育園の職員など34人だ。目的は、病気や障害がある高齢者の訪問活動をする際に、どのような対応をすればよいかを学ぶことだった。

勉強会では、まず埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科の及川裕子先生が鬱病患者の接し方を、埼玉医科大学保健医療学部の高保恭子先生が認知症老人に対する会話の仕方を話した。

自立できる支援を

訪問活動をするときに大切なのは、「被災者が自分で生活していけるようにすることを目標に支援を行うこと」と、お二人は言う。さらに規則正しい生活をしているかどうかを、ごみ箱の中味などで確認し、もし問題が

訪問活動際に気をつけることなどを細かく話す久保先生(左)と及川先生



あれば次の対応をとる必要があることなど、細かな留意点についても説明をしていた。

そのほか及川先生は、「私はあなたの味方で、あなたに関心がありま」と高年齢者に伝えることが重要です」などと、訪問活動の際の心構えも話した。

質問に丁寧なアドバイス

この日の研修会の最後には、質疑応答の時間が設けられた。

参加者からは、日常生活の中での高齢者への対応などに関しても質問をしていた。先生方は、一人ひとりの質問に対し、時間をかけて丁寧なアドバイスをした。

研修会終了後には、このような機会を今後も持つてほしいという声が多くあがった。これを受けてふるさとネット事務局長の伊藤奈穂子さんは、「勉強になりました。参加者の悩みを解決できるように研修を、今後も続けていきます」と話していた。

ネット情報コーナー

アカコッコ通信「短縮版」

インターネット上にある今年6月から今年8月までの三宅島に関する情報です。

15日 公開シンポ実施

日本災害情報学会と東京都立三宅高等学校の共同開催で、9月15日(土)10時から、三宅高校体育館で表記のシンポジウムが開催され、この7年間の火山災害を振り返り、現状と課題について考察し、復興に向けての展望を行います。

日本災害情報学会
(<http://www.jasdis.gr.jp/index.html>)

火山ガス説明会を開催

三宅島で6月16日の夜、火山ガスに対する安全確保策などについて、住民への説明会が開かれました。この説明会では、今も居住が禁止されている地区のうち1カ所、来月から2か月間、一時的に居住を認めることに

なつた経緯が説明されました。

6月17日(日) NHK ニュース (<http://www.nhk.or.jp/nhknet/spot/miyake/index.html>)

7年ぶりに園芸作物を出荷

三宅島で、かつて盛んに栽培されていた園芸作物のレザーファンが、火山ガスを避ける農業用のハウスで本格的に栽培されるようになり、噴火以来、7年ぶりに出荷が行われています。

7月3日(火) NHK ニュース (<http://www.nhk.or.jp/nhknet/spot/miyake/index.html>)



ふるさとネットのメンバー5人が神戸に

訪問活動など経験「三宅に生かすために」

神戸での活動

【8月7日】

○神戸到着後、「人と防災未来センター」見学
○「1・17希望の灯り」や被災者慰霊モニュメント見学
○倒壊した高速道路の橋脚などを見学

【8日】

○復興住宅で訪問活動
○伊川谷および板宿でふれあい喫茶の手伝い
○阪神高齢者・障害者支援ネットワークの黒田裕子理事長と佐藤会長が座談会実施（4・5面に記事）

【9日】

○被災者生活支援長田センターを訪問
○駒ヶ林保育園を訪問
※神戸訪問には、卒業生が本紙の編集作業をしている向上高校新聞委員が同行した。

佐藤就之会長を初めとした三宅島ふるさと再生ネットワークのメンバー5人は8月7日から3日間、被災者への支援の方法を学ぶため神戸を訪れた。現地では、阪神高齢者・障害者支援ネットワークという団体のコーディネートで復興住宅の訪問活動などを経験。その中で、被災地間の連携も深まった。

1日 震災の状況を確認

7日は、神戸到着後まず中央区にある「人と防災未来センター」を見学した。ここでは、映像や音によって、震災の恐ろしさを体験するとともに、語り部の市原聰美さんから被災者の苦しい体験を聞いた。

その後、三宮にある東遊園地に行き、「1・17希望の灯り」や震災で亡くなった人の名前を刻んだプレートのあるモニュメントを見

学した。

「1・17希望の灯り」は、東京都板橋区で同ネットが2006年11月に開催した「避難解除丸2年 板橋の集い」の際に分灯。震災を風化させないための活動を続けている神戸の白木利周さんから、佐藤会長に手渡されている。

2日目 訪問活動を経験

8日は震災以来、被災者の支援を続けている阪神高齢者・障害者支援ネットワークのコーディネートで、高齢者宅の訪



佐藤会長が披露する喫茶ふれあい



メンバーが聞く希望の灯り1・17



（左）伊藤事務局長と神戸の被災者

事務局長 伊藤奈穂子さん

「まずは組織づくりから」

神戸で復興住宅の訪問活動をして、被災者同士の係わり合いが薄くなっているところは、三宅の現状と同じだと思いましたが、活動をコーディネートしてくれた黒田裕子さんか

ら、話し方、体の摩り方など、一人ひとりに合った接し方をするのが必要だということを学びました。

問活動や、引きこもりを防ぐために開かれている「ふれあい喫茶」の手伝いなどを行った。

このような活動の中で、神戸の被災者との交流を深め、また、被災者の支援をする団体間の連携を強くすることができたようだ。

3日 長田センター等へ

最終日の9日は、以前からおつき合いのあった「被災者生活支援長田センター」を訪ね、主事である柴田信也さん、運営委員長の佃真人さん、被

災者の方と交流をした。その中では、ここに通う被災者の家庭の半数が子どもが小学校に通うための援助を受けており、習い事や塾に通えないなど、親が被災したために起きているなど、次世代への影響に関する話などを聞いた。

その後、一行は駒ヶ林保育所へ向かった。所長先生は、閉鎖された三宅島の学校の校歌をオカリナで演奏し、CDに収録してくれた。訪問は、そのお礼をすることも目的の一つだった。

復興の懸け橋に

夏の神戸で座談会を実施

三宅島ふるさと再生ネットワークのメンバーが神戸を訪れた際、本紙の編集を担当するDTPAと向上高校新聞委員会が、佐藤就之会長と、阪神高齢者・障害者支援ネットワーク理事長の黒田裕子さんによる座談会を共同で企画。災害とボランティアということに視点を置いて話をしていただいた。

※文中の「黒」は黒田さん、「佐」は佐藤会長、「司」は司会を示す

少なくなった報道

望まれる継続的な扱い

司神戸は被災から12年、三宅は7年以上がたち、報道される機会も少なくなりました



貴重な意見が出された座談会

が、現在の状況をお話してください。黒1月17日が近くと一斉に報道されますが、そこにいくまでのプロセスが重要で、12年間のよいところ、悪いところを検証するような報道がほしいですね。実際にまだ、昨年は、復興住宅で66人が孤独死しているのが現状なので。佐行政は、全島避難指示が解除された時点で噴



佐藤就之会長

火被害は終

了したという判断を下しているんです。だから、まだ島の45%が立ち入り禁止地域で、千人の方が帰れないということを知らない人が多くいます。私たちは、島の状況を知らせるために、いろいろな場所ですそれを伝える努力をしています。

交流の重要性

生まれる新たな視点

司各地の被災者が交流することによってどんな意味があるとお考えですか？黒忘れかけていることがまた思い出され、新たな発見や学びができるのが、よいことだと思えます。お互いに共有できることが多いので、理解が深まります。だから、もっと交流を深めていくのが必要だ

被災者支援・長田センター お茶処等で新たな出会いを



長田センター

「行く所がある」という思い持つてほしい
震災直後から被災者の支援を続けてきた「日本基督教団兵庫教区 被災者生活支援・長田センター」では、「新たな出会い」をモットーに、お茶処を開いたり学習交流活動を行ったりしている。同センター主事の柴田信也さんは、「ここでは場の提供を行って、例え誰も来なくても、やっていることで被災者の方に『行く所がある』という思いを持つてほしいのです」と話した。ふるさとネットのメンバーは、9日のお茶会に参加し、集まった方と交流した。

と思いますね。

司佐藤さんは、今回神戸を訪れてどのように感じましたか？

黒神戸の人たちの災害を風化させない努力は力強いものを感じます。三宅では、避難指示が解除された際に、そういう努力をしようというのを合言葉にしたんですが、なかなかできていないんですね。神戸にはいろいろな団体があるので、そこは神戸の人たちから学ん

でいきたいです。司黒田さんが三宅の方に伝えたいことはどんなことですか？

黒これから高齢者が多くなるので、その点においてはお互いに気をつけなければなりません。孤独死などが起きないように、閉じこもるのを減らすことなどが大切ですね。そのことに、神戸がこれまで学んできたノウハウを、利用していただけたらと思います。

黒田裕子さん

阪神淡路大震災被災者。震災前までは宝塚市立病院看護部に勤務していたが、震災後は同病院を退職。現在は「NPO法人阪神高齢者・障害者支援ネットワーク」理事長、「NPO法人しみん基金・K O B E」理事長、「NPO法人日本ホスピス・在宅ケア研究会」副理事長を務めている。

それと同時に、大学や専門学校で非常勤講師も務めている。固定チームナーシング・看護管理・ターミナルケアが専門分野。震災以後は、仮設住宅支援のボランティア活動のかたわら、災害看護、ボランティアのあり方、などについての講演も行っている。

被災地の連携を 会長と黒田裕子さん



黒田裕子さん

ボランティアではない

不可欠なボランティア
「今必要なこと」考えて
司ボランティアが果たした役割について話してください？
佐行政機能は、予算の関係で縮小しています。だから、自然災害が起きた際にはボランティアの力がないと何もできません。大切なのは、それをまとめるリーダーの存在ですね。黒おつしやるように、これからは行政だけではなくてもやって

いけないですね。ボランティアというのはいき間を埋めるケア」という意味で大きな役割を果たしていると思います。声なき声を吸い上げ、それを支援に反映させるということ。司どのような活動をする必要があるのか？黒ボランティアは、「何をすべきか」をきちんと考えなければいけません。例えば能登の仮設住宅では、一人暮らしの高齢者に、ご飯を持っていくなど、何もかもしてあげた結果、自分で歩けなくなってしまうというケースがありました。「何でもしてあげるのボランティアではない」

伊川谷工房・あじさいの家

豊かな時間を仲間と



デイサービスでのフラダンス教室

とネットのメン

黒田裕子さんが理事長を務める阪神高齢者・障害者支援ネットワークが運営している「伊川谷工房・あじさいの家」。ここでは被災者の方に仕事や相談、集いの場を提供したり、デイサービスを行ったりして、仲間との豊かな時間を過ごしてもらっている。ふるさとネット

バーが訪問した日は、デイサービスが行われていた。プログラムは、書道や簡単な体操やフラダンス、英語の勉強など盛りだくさん。参加者は親しい仲間と一緒に、楽しく過ごしていた。後半の歌の時間には、佐藤会長も飛び入りで参加。自慢の歌声を披露し、利用の方との交流を深めた。

と、常に心に留めておくことが必要です。
引き継ぐことが大切
経験を将来の糧に
司災害の際のボランティアの活動が、その後の復興期に引き継がれていない面があると思うのですが。黒そうですね。何が原因かはわかりませんが、神戸では若い人たちが、継続的に活動してくれているケースはほとんどないですね。佐三宅では、先ほども話したように、行政がある程度の時期で線を引いたんですね。だから、ボランティアをし

ら、ボランティアをしたくても受け入れ先がないという状況になってしまいました。これからは、被災者自身が受け入れの体制をつくる必要があると感じます。引き継がれないと嘆くのではなく、どのように引き継ぐかを考える時期にきていると思います。司今後、必要だと思う対応は？黒神戸の教訓が生かされた部分はたくさんあると思います。私たちの意見をもとに、中越地震の際には、仮設住宅に、地域ごとに住民を入居させるようになったことなどですね。ボランティアの活動も含め、被災地の経験を引き継いで行くことが大切だと思います。

場所には家を建てて、コミュニティも回復する。それが、心の復興につながるのだと思います。被災した地域が連携することで、このような意見をまとめることが必要です。黒神戸の教訓が生かされた部分はたくさんあると思います。私たちの意見をもとに、中越地震の際には、仮設住宅に、地域ごとに住民を入居させるようになったことなどですね。ボランティアの活動も含め、被災地の経験を引き継いで行くことが大切だと思います。

27 時間テレビの感想を聞く

懐かしい味に感動の声



収録前に島の話で盛り上がる会場

7月26日に放送された27時間テレビの「ハッピー筋斗雲」というコーナーで、「三宅島の帰りたいくても帰れない人々に笑顔を届けます」が放送された。SMAPの香取慎吾さん扮する孫悟空と、泉ピン子さん扮するがばいばあちゃんが、参加者に料理を振舞った。出演者には内緒で行われたこの企画、収録直後に聞いた島民の声を紹介する。

港区在住 大内一宏さん(66)

お茶会だと思っていたので驚きました。まさかタレントさんにかえるとは思っていませんでした。島の料理を食べたときは、「この味だな」と思いました。いろいろなことをしてもらって感謝しています。27時間テレビで取り上げてもらって、まだガスは出ていて、避難生活の人もいるというところを多くの人に感じてもらえたら

【お便り】(要約)

中越地震で育ってきたふるさとに帰れない人も多くいます。ふるさとを想い愛することはそこを大切にしたい気持ちからです。これからもますますのご活躍をお祈りします。

(新潟県長岡市金子智様)

【ご寄付者名】

(6月25日～8月7日)

倉持房枝様、小久保泰枝様、井上教子様、南海タイムス社様、平松尚志様、鶴吉様、須藤幹雄様、高橋栄一様、横井和之様、竹澤光男・美穂子様、久保恭子様、遠藤正子様、遠藤文代様、光安千久子様、三間志津憲様、太田久子様、荻野和子様、吉野文雄様、中村延康様、江利川夏枝様、山下文子様、小池上照子様

嬉しいですよ。

練馬区在住 榎正治さん(65)

島民だけでなく泉ピン子さん、香取慎吾さんにも会うことができ、有意義

な時間を過ごすことができました。三宅島を支えてくれて多くの方たちに、今度私は私たちがおもてなしをしたいです。

編集後記

神戸での取材では多くの事実に出会い、学ぶことができました。3日間という短い時間ではありましたが、現地へ足を運ぶことの大切さを実感しました。
『仲間がいる』そう思っただけで前向きになれたと神戸の語り部の人。また、27時間テレビのテーマは「なまか」でした。私たちは人と人との繋がりを大切にしたいと思いました。(DTPA一同)

三宅島高校生も発表

公開シンポ 充実した内容で

2面の「アカコッコ通信」に掲載した日本災害情報学界と東京都立三宅島高等学校共催のシンポジウムは、2007年9月15日と16日に、3部構成のパネルディスカッションと、特別講演、特別発表という内容で開催された。

佐藤会長も発言する。パネリストは、静岡大学教授の小山真人氏や気象庁地震火山部火山課長の横田崇氏、三宅村村長の平野祐康氏、三宅村長が基調講演を担当。日本テレビ放送網報道局社会部担当部長の谷原和憲氏、早稲田エコステーション研究所代表研究員の藤村望洋氏など大妻女子大学人間関係学部教授千川剛氏がコーディネ

7年間の振り返り 現状と課題を復興への展望に

ネーターを務める。また、特別講演は環境防災総合政策研究機構専務理事の宇井忠英氏による「活火山地域における危機管理と共生」。特別発表は、三宅高校生3名の「復興に向けての三宅高校の取り組み」などが計画されている。

そのほか、15日には参加者の懇親会、16日には島内バス見学会も予定されている。